

令和8年度 学校評価表

学校経営目標 子ども達がわくわく 教職員が働きがいのある学校 学校教育目標 「気づき 考え 行動する」 ～自分を知り 認め合い つながって～ めざす子供像 挑戦する子ども・体験をもとに気づく子ども・対話を通じて考える子ども											
目標に対する割合の評価基準 4・・・101％～ 3・・・80～100％ 2・・・60～79％ 1・・・60％未満											
目標		実践			評 価						
	中期経営目標	短期経営目標	目標達成のための方策	評価項目（評価方法）	目標値		今回の達成割合	目標に対する割合	評価	成果と課題の分析	改善の方向性
					中間	最終					
確かな学力（知）	○確かな学力を身につけ、主体的に学び合う児童の育成	【1】 ・単元を通して自ら問い、考え、問いを解決しようとすることができる。 ・対話を通じて自分の考えを深めることができる。	・児童自身が問いを見つけ、問題解決をすることができるような単元構成の工夫する。 ・自分の課題を見つけ、自分で計画を立てて学びを深めるTTT(学力補充)の実施する。 ・協調学習を実施するとともに、協調学習での学びと普段の授業での学びとのつながりを児童と共有する。 ・児童が自分の考えをアウトプットする場や時間の充分な設定する。	・学期まとめテスト(国・算・理)で標準得点以上の児童の割合。 ・年に3回程度の協調学習の実施。 ・児童アンケートで肯定的評価をした児童の割合。	70%	80%	61%	87%	4	・理科の研究を中心に、児童の問いを重視した単元構成を工夫したり、TTTや自主学習等で自分の課題にあった学びを進めたりと、課題の解決に向けた自律的な学びを進めてきた。国語の単元テストでは概ね標準得点を超えたが、算数と理科には課題が残る児童が多い。 ・複式学級で協調学習をすることが難しい場合もあるが、各学級で社会科や生活科、理科等の協調学習に取り組むことができた。また、協調学習での対話を普段の授業にも生かすことができるよう、児童同士のやり取りを大切にした授業展開を各学級で継続して行っていることが対話を通して自分の考えを深めることができる姿につながっている。	・授業では引き続き児童の問いを重視した単元構成を工夫する。算数や理科については、授業の中で抽象的な学習内容を具体物に置き換えたりしながら説明させるなど、指導の工夫をする。学力補充については算数や理科の補充の時間を意図的に設定するなどし、学力の定着を図る。
					50%	100%	55%	110％			・引き続き協調学習とのつながりを意識し、児童のやり取りの場を充分に設定した授業づくりに取り組む。その際、分からないことにこだわって友達に質問する姿や、友達の意見を聞いて考えをよりよくしようとする姿を価値づけ、さらに対話を通して自分の考えを深めることができるようにする。
					70%	80%	90%	114％			
豊かな心（徳）	○自他を尊重し、豊かな感性と道徳性を備えた児童の育成	【2】 ・自分自身のよさに気づき、のばすことができる。 ・特別活動を中心とした絆づくりの推進	・自分自身をふり返る道徳の授業づくりを行う。 ・学級活動、委員会活動での全校が楽しめるような場の設定	・児童アンケートで「自分にはよいところがある」と肯定的評価をした児童の割合。 ・児童アンケートで「学校が楽しい」と肯定的評価をした児童の割合。	75%	80%	97%	129%	4	・道徳の授業ではもちろんのこと、それ以外にも日記で毎日のふり返りを行ったり、行事ごとに作文を書いて自分の頑張りをふり返ったりと、自分を見つめる時間を取ることが、自分の良さに気づくことにつながっている。 ・高学年を中心に、楽しめる企画を考えて実行したり、委員会としての活動に工夫をもたせたりするなど、みんなが「楽しい」と感じられるような取組を児童主体で行うことができた。	・引き続き、自分で自分を見つめる時間をつくり、児童が成功したことも失敗したことも素直に振り返ることができるよう指導していく。 ・高学年発信で活動を行うだけでなく、低学年、中学年からも発信して行っていけるような取組を担任中心に考え、学年主体で取組を実行した時の達成感や充実感を感じられるようにしていく。
					75%	80%	97%	129%			
健やかな体（体）	○基本的な生活習慣や、健康でたくましい体力・気力・耐力を備えた児童の育成	【3】 ・体力づくりを通して、憧れと挑戦、自分への期待をもつことができる。 ・食育を通して、自ら食べ力を育てることができる。 ・三点固定の取組を通して、自らよりよい生活習慣をつくることができる。	・1学期は全校体育や遊び、体育の授業の導入時に、柔軟性・持久力に関する取組を中心に行う。2学期以降は、マラソン大会を中心として、持久力を伸ばすことができる取組を継続的に行う。 ・栄養バランスを考慮するとともに、児童の食べ切れる量を見取り、適量を提供する。家庭での実践につなげるために、家庭科や生活科など、教科と給食をつなげた取組を行う。 ・児童が規則正しい生活のよさに気づき、自らの生活リズムを確立していくために、家庭と連携しながら、生活を記録する「3こて週間」の取組を行う。	・新体力テストにおいて、「長座体前屈」の数値および「20mシャトルラン」の回数が、昨年度の記録を超える割合。後期はマラソン大会にて目標値を定め、その記録を超える割合。 ・児童アンケートで、「健康に過ごすために、給食でいろいろな食べ物を残さずに食べている」と肯定的評価をした児童の割合。 ・児童アンケートにおいて、「3点固定」ができている児童の割合。	70%	80%	61%	87%	4	・全校体育や体育の授業の導入時に各学年の発達段階にに応じて、いろいろな動きを取り入れた運動を継続的に行った。その結果、体力テストでは、総合的に体力の向上が見られた。しかし、柔軟性や持久力については、積み重ねが足りず、記録が伸びない児童もいた。 ・毎日の給食では、全体としては残菜がほとんど出ずよく食べている。個人的には減らしたり残したりする場合もあるが、1学期に比べると少なくなっている。1学期は主に生活科で文豆の豆むきやえんどうの筋取りなどを行った。その活動の紹介によって、児童が食べ物の大切さや調理員の仕事を理解することに繋がった。 ・起きる時刻、家庭学習を始める時刻、寝る時刻を決め規則正しい生活ができていると答えた児童の割合は84%であった。6月に生活調べを行った際は、児童が自分の決めた時刻を守り、規則正しい生活をしようと心がけて生活できた児童が多かった。	・下半期は、上半期の取組に加え、全校体育や、校内マラソン大会へ向けた朝会時間でのマラソンタイムを軸とし、持久力・柔軟性の向上を目指す。 ・これから本格的な成長の時期になるので、各個人が成長に応じて適切な量の給食を食べられるように指導していく。また、委員会活動と連携した取組や家庭科の献立作成などを通して、家庭の実践につなげるように取り組む。 ・健康に良い生活習慣を身に付けさせるためには、家庭と学校が連携して子供たちの生活づくりを考えることが大切である。今後も、「3こて週間」を活用して子供達自身が生活時間を考え、良い習慣を実践できるように家庭と連携しながら取組を進める。
					80%	90%	95%	118％			
					80%	90%	84%	105％			

信頼される学校	○教職員が協働し、地域・保護者と連携し、信頼され開かれた学校づくりの推進	・コミュニティスクールと地域の人材活用を積極的に行う。	・地域の人材や素材を活用した授業や取り組みを全年で行う。	・全学級が年間に2回以上、地域の人材や素材を生かした取り組みを行う。	100%	100%	100%	100%	3	・全学級、上半期終了時点で目標を達成している。学校内にとどまらず、地域の人や自然・文化を活用することは、子どもたちにとって、地域の良さを直接感じる絶好の学びの場となっている。 1・2年生・・・龍頭峡(保育所と一緒に)に出かけ、季節を感じる活動を行ったり、生き物に触れたりし、自然や命の大切さの学習をすることにもつながっている。 3・4年生・・・総合的な学習の時間に、「スマイルサポートプロジェクト」と題し、福祉をテーマに学習している。その際、社会福祉協議会の方などから、福祉についてお話を伺ったり、車いす体験などをさせてもらっている。 5・6年生・・・総合的な学習の時間に、筒賀の魅力を発信し、地域の方に喜んでもらおうと、野菜作りに励んでいる。土づくりや野菜の育て方を地域の方から教えていただいている。 全校・・・井仁への遠足。アクティビティ体験。	・今後下半期も、たくさんの地域の人や自然などを生かした教育活動を推進していく予定である。
		・「働きやすさ」と「働きがい」の推進	・教職員の意欲を重視した取組や研修を実現する。	・「自分の業務にやりがいをもてている」と感じる職員の割合。	100%	100%	89%	89%		・多忙感を感じながらも、教職員それぞれに、自己の業務に責任とやりがいを感じながら取り組むことができている。子どもたちの成長する姿を教職員で共有し、そのことが私たちの喜び・働きがいにつながっている。	・引き続き、自己の業務に責任を持ちながら、子どもたちの成長を喜び合える教職員集団でありたい。